天気晴朗なれども波高し

JJ1SXA/池

現在（2022年5月）、ロシアによるウクライナ侵攻で、戦い酣だが、今を去る117年前の1905年、時は明治、日露戦争での日本海海戦で、日本は大勝利を収めたのだが、東郷平八郎が乗艦の旗艦・三笠から大本営に送られた電報（電文作成は参謀・秋山真之）、「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊はただちに出動これを撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し」が名文として有名だが、私も今まで、何げなく、単に名文だなあと思っていたが「…本日天気晴朗なれども波高し」には奥深い意味があった事を知りました。

それは、先ず最初に、この電文の基になったのは、当日朝の天候を解析した岡田武松中央気象台予報課長は、6時の天気図をもとに、朝鮮半島北部にあった発達した低気圧は日本海北部に去るため、対馬海峡付近は天気が晴れるものの、等圧線の間隔が狭いので風が強く、波も高いという予報をし、「天気晴朗ナルモ波高カルベシ」との情報を連合艦隊に伝えたが、迅速に伝わった、当時のこの先端情報インフラに驚きます。

秋山中佐は、この気象情報を電文に取り込んでいるが、単なる修飾字句では無く、天気、海戦の可否、戦術に至るまで、戦いに必要な全ての情報を込めているようです。

実際の電文は、暗号・平文混じりで「アテヨイカヌ　ミユトノケイホウニセッシ　ノレツヲハイハタダチニ　ヨシス　コレヲ　ワケフウメル　セントス　ホンジツテンキセイロウナレドモナミタカシ」だったとのこと。

「本日天気晴朗なれども波高し」に込められた意味の結論は、「勝利疑うところ無し」です、その理由は、…当時ロシアは列強に名を連ねる大海軍国でしたが、はるばる欧州から日本海へ回航してきたバルチック艦隊では水兵の錬度が低く、長期の航海による疲弊が積み重なっていた、一方日本は全体の速力を重視してそれに見合った最新の速度の速い戦艦を手に入れ高速性を高め、またその速さゆえに短時間での射撃の精度が求められ、これに関しては入念な訓練を行っていた、また日本近海は大西洋に比べて波が高く、艦もそれに対応できる構造になっており、射撃精度もこれを計算に組み込んだ上で訓練が行われた、つまり艦隊全体の戦闘力としてはほぼ互角にまで持ち込んでおり、砲撃能力においては優っていた、そのため、天気がよく視界も鮮明であるため射撃にとっては好条件であり、波が高ければこちらのほうが揺れに強いため射撃精度に差をつけることができる、したがって勝利疑うところ無し…ということです。

平時からの情報インフラの整備という意味では、日本が世界に誇る戦略を持っていた時期もあったのだ、20世紀初頭までには、明治初期からの電気工学と物理学の蓄積のもとで無線電信技術や蓄電池技術が急速に発展し、朝鮮半島などと日本を結ぶ海底電信ケーブルの敷設技術も十分蓄えられていた、よって、日露戦争の日本海海戦で、当日朝の天候を解析した中央気象台の情報が連合艦隊に迅速に伝わった裏には、この先端情報インフラがあったお陰だ、しかし、その後の日本は、平時におけるサイバー戦略の構築にほとんど目を向けてこなかった、これが、日本の現在のITインフラは、世界標準から周回遅れと言われる由縁だ。

（2022年5月記）